

Discussion Paper Series A No.566

ロシアにおける「中国人ディアスポラ」と境界維持

堀江典生
(富山大学極東地域研究センター)

2012年4月

Institute of Economic Research
Hitotsubashi University
Kunitachi, Tokyo, 186-8603 Japan

ロシアにおける「中国人ディアスポラ」と境界維持

堀江典生

富山大学極東地域研究センター

1. はじめに

1930年代後半、旧ソ連極東地域から中国人および朝鮮人住民の多くが強制的に国外追放となり、中ロ国境では人の往来は厳しく管理されるようになった。それから1988年まで事実上ロシアと中国の間には国境を往来する環境はなかった。1986年のゴルバチョフ書記長の「ウラジオストク演説」は、急速に中ソ関係を改善させ、1988年から中国人のロシアへの渡航が再開されたが、続くソ連崩壊はロシアの国力の低下、中央の地方統治力低下を促し、中国と国境を接するロシア極東地域において安全保障への関心を高めることになった。安全保障のジレンマとしてアレクセーエフが描いたものは、中ロ経済交流が進み中国製品により恒常的な物不足が解消される一方、それと表裏一体の中国人移民の流入およびその経済力や文化の浸透がロシア極東地域においてロシアの主権を脅かすことになるのではないかとの認識を生み出すジレンマであり、それに伴うロシア市民の中国人に対する反移民的敵意の増殖であった(Alexseev, 2006)。特に、中ロ国境がまだ確定されていなかった90年代において、そうしたジレンマを生み出す土壌は確かにあった。

すでに別稿でも論じたが、ロシアでは中国人不法移民情報は誇張され喧伝される傾向にある。再開発が進まず、市場経済化に伴う地域経済の斜陽が放置され、極度の人口減少・流出に悩みながら、その損失を補うために多くの他の地域が受け入れているような旧ソ連諸国の移民労働者の受入もままならず、中国および北朝鮮からの移民労働者に依存せざるをえない極東ロシアの地政学的な立場から生まれる焦りがロシア極東地域にはあり、そうした地域の根本的な問題が解決しないままでは、常に脅威論が再燃する危険性がある(堀江, 2010, p.16)。さらに、1990年代、ロシアにおいては中国人移民・出稼ぎ労働者・商人の活動をロシアは正確に把握できていたわけでもなく、ことさら中国人を標的として、アジア系移民を対象とした反移民的敵意を増殖させてきた。そうした人騒がせに脅威を煽る議論とは距離をおこうとするならば、ロシアで取り上げられ、我が国においても中ロ関係で必ず取りあげられる中国脅威論に対しては、ことさら冷静な視線を私たちは必要とする。そして、そうした脅威論が再燃しやすい環境のしくみを冷静に分析し、敵意の増殖が連鎖することを防ぐ必要がある。

本稿では、ロシアの日常言語にあふれる様々なロシアの中国および中国人認識のなかで、「中国人ディアスポラ」という表現に着目し、それがどのようなメタファーとし

・本研究は、平成23年度一橋大学経済研究所共同利用共同研究拠点プロジェクト研究、科学研究費補助金基盤研究(B)「ロシア極東再開発の潜在力と限界：中ロ経済相互依存関係から見る諸課題」(課題番号：21402019)、科学研究費補助金基盤研究(A)「東北アジアにおける辺境地域社会再編と共生様態に関する歴史的・現代的な研究」(課題番号：23251003)

てロシアにおける中国人脅威論を支えているかを論じる。冷静な視線を生み出す基本は、やはりロシアに滞在する中国人の活動をよく理解することである。それと同時に、ロシアが中国人の活動をどのように認識し、ロシアの住民や識者やマスコミが中国人をどのように集団として捉えようとしてきたか、換言すれば、ステレオタイプがどのように形成されてきたかを理解することである。ロシアのマスコミや一部研究者は、一時滞在者を含め中国人を「中国人ディアスポラ」と名付けて描くことがしばしばある。「中国人ディアスポラ」というメタファーがどのような装置として中国脅威論を支えることになっているのか。これが、私たちが本稿で解き明かそうとしている課題である。ロシアの住民や識者やマスコミが中国人移民を大括りで異質な他者として描き、他者を受け入れない境界を意図的に引くために利用される「中国人ディアスポラ」というメタファーを考察することで、日常の言説のなかでみられるホスト社会の意図された「境界維持」を批判的に検討したい。

2. メタファーとしての中国人ディアスポラ

ロシアにいる中国人をロシアでは「中国人ディアスポラ」と呼ぶ傾向がある。この傾向は、マスコミから研究者レベルまで広く見られる傾向である。ロシア科学アカデミー極東研究所のウラジミール・ポルチャコフは、次のように中国人ディアスポラという表現を活用している。

「ロシアの中国人ディアスポラの現在の規模がそれほど大きくないという現実を見れば、アラームが言うことに何の根拠もなければ、パニックに陥る必要もない。とはいえ、我が国の中国人移民問題への様々な憶測がやむことはない。」(Портяков, 2006, p. 10)

ロシアを代表する中国研究者であるオストロフスキー¹も、次のような使い方をしている。

「中国との経済通商関係のさらなる発展は、ロシアにとって、特にロシア・アジア部にとって基本的に重要ではあるが、我が国領土内での中国人ディアスポラとの接触と彼らの増加を引き起こす。しかし、“黄禍論”は、今日の傾向にあるように中国の急速な経済発展が持続し、ロシアの経済衰退が続く場合にのみ問題となる。それゆえ、この問題を解決するには、ロシアの経済的潜在力、特に我が国東部の経済潜在力を高めることにある。」(Островский, 2002, p.45)

ポルチャコフにしてもオストロフスキーにしても、「中国人ディアスポラ」という言葉で表しているのは、ロシア極東の数少ないロシア国籍をもつ中国人定住者と多数派であり頻繁な往来を常とする一時滞在者であるビジネスマン、商人、そして出稼ぎ労働者

¹ アンドレイ・ヴラジミール・オストロフスキーは、ロシア科学アカデミー極東研究所副所長であり、この研究所の中国経済社会研究センター長であり、中国の労働市場に詳しい研究者として知られている。

のことである。

ウラジオストクにあるロシア科学アカデミー極東支部極東諸民族歴史・考古学・民族学研究所のビクトル・ラーリンは次のように述べている。

「近年、中国人労働ディアスポラがロシア東部国境地域において安定的な基盤を形成している。それは契約労働者と企業・合弁会社の雇用者、零細企業家、主にビザなし観光の資格でロシアを訪れる商人などによって構成されている。社会学的調査によれば、ロシアに定住する中国人の6割はロシア語をある程度操り、彼らがロシア市場をターゲットにしていることを表している。ロシアに一年未満しか滞在したことがない中国人は、4分の1しかおらず、4分の3はコンスタントに2度以上ロシアを訪問している。」(Ларин, 2001, с. 96-97)

この「中国人労働ディアスポラ」という表現は、ラーリンが定住者に限らずに援用していることから、中国人労働移民という程度の用法で使ったのだろうと思われる。ロシアのマスコミにおいてもそうであるが、出稼ぎ労働者も含め、短期滞在の中国人に対してもディアスポラを移民という言葉と同義で使う場合が散見される。

ロシアにとって異質な民族集団としての中国人の存在に対して、ディアスポラという言葉が流布する傾向にあると考えられる。ロシアの新聞各紙を検索すれば、かならずどこの新聞でも中国人ディアスポラという表現を見いだすことができる。具体例を挙げよう。

「モスクワで最も閉鎖的な集団のひとつである中国人ディアスポラの生活がどのようなものであるか、明らかになった。」²

これは、モスクワ大学のヴィリヤ・ゲリブラスの研究を紹介しながらチェルキゾフスキー市場での中国人移民の活動や中国人労働者、商人、中国人留学生の現状を記事にしたものである。ロシア国籍をもつ中国人定住者はこの記事に登場しない。この記事には、この「中国人ディアスポラ」という表現の他に「中国人」、「中国人移民」、「中国人商人」、「中国人学生」、「中国人院生」といった中国人を表す言葉とともに、「中国人共同体(китайская община)」という集団性をもつ名称も使われている。この記事で紹介されたゲリブラスの論文(Гельбрас, 2009)には、後に述べる理由から「中国人ディアスポラ」という表現も「中国人共同体」という表現も出てこない。

「ユニストラム銀行副社長スザンナ・ウズニャンは、中国と仕事をするロシアのビジネスマン同様に、中国人ディアスポラがユニオン・ペイのカードを取得するだろうと確信している。」³

² イズベスチア電子版の記事 (<http://www.izvestia.ru/news/349576> : 2010年6月28日取得)。

³ イズベスチア電子版の記事 (<http://www.izvestia.ru/news/516840> : 2012年3月29日取得)。

「人権運動家やジャーナリストによれば、ウラル南部の農園における中国人の労働は、ふたりの中国人によって管理されており、彼らはトリアドと呼ばれる犯罪組織の代表である。そのうちの一人は、チェリャビンスクの高級ホテルに住んでいて、月 30 万ルーブルの家賃を払っている。スズダロヴァによれば、この中国人ディアスポラの代表たちは、野菜の販売で儲けたルーブルを毎月ドルに換金し、税金を払うことなく本国に送金している。」⁴

これら上記ふたつの記事も、定住者や非定住者の区別なく、中国人ディアスポラという表現を利用しているのがわかる。また、次の記事は、前述のオストロフスキーへの電話インタビューに関する記事であるが、ここでもオストロフスキーの言葉かどうかは定かでないにせよ、少なくとも中国脅威論を諷める論拠の説明でも、中国人ディアスポラという言葉が語られている。ここでの中国人ディアスポラは、この記事で 2007 年の小売りでの外国人労働者活用の禁止以降、中国人が減少している傾向を説明しているように、定住者のみならず出稼ぎ労働者としての中国人や商人をも範疇に含んでいる。

「中国人ディアスポラが、ロシア極東地域の”コソボ化するシナリオ”を実現することはないし、ロシア極東地域において中国人がロシア人の和を上回ることは決してないので、独立を宣言する可能性もない。」⁵

これらの例は、特に中国人移民問題をことさら大げさに報道することを目的とした著者や記者だけによるものではない。ロシアの学界でもマスコミでも、「中国人ディアスポラ」を、本来の意味での移民であろうが、移民に分類されない一時滞在者であろうが、ロシアにいる中国人を総称する意味で使われることが多い。

もちろん、ロシアの移民研究者のなかには、一般に流布する中国人ディアスポラという言葉説を戒めるために、中国人ディアスポラという見方はロシアにおいて成立しないと論ずる研究者もいる。ザグレブノフ (Загребнов, 2007) は、ロシア極東地域の中国人が国境沿いの教育レベルの低い一時滞在者⁶であることから、ディアスポラと呼ぶことに反対している。

また、ゲリブラスも安易にディアスポラという言葉で中国人集団に当てはめることを諷めている。彼は、ロシア語で移民集団を表す言葉でディアスポラ、共同体 (община)、同郷人組織 (землячества) を区別し、中国人移民の分析視角として「同郷人組織」を採用している (Гельбрас, 2001, 2004, ゲリブラス, 2005)。ディアスポラ、共同体、同郷人組織は、

⁴ 独立新聞電子版の記事 (http://www.ng.ru/regions/2011-09-20/5_slaves.html : 2012 年 3 月 29 日取得)。

⁵ ハバロフスク・ノーヴォスチ (Хабаровск-новости : インターネット配信ニュース) の記事 (<http://news.khb.ru/print.php3?news=11915> : 2011 年 5 月 11 日取得) より引用。

⁶ 教育が低いことがディアスポラ定義に影響することはないにもかかわらず、こうした評価を行う背景には、ロシアにおける中国人出稼ぎ労働者をクーリー (苦力) として描く論者のイメージが大きく影響していると疑いたくなる。これについては、第五節において論じる。

ロシア語ではしばしば類語・同義語として扱われてきただけに、ゲリブラスはこの3つの峻別により中国人移民分析に新たな境地を見いだした。それゆえ、安易に中国人移民をディアスポラと呼ぶことには一家言をもっている⁷。彼の功績か、マスコミでも中国人同郷人組織という言葉が中国人ビジネス・グループなどに使う例が散見されるようになっている。

モスクワにあるロシア科学アカデミー極東研究所のアレクサンドル・ラーリンは、最近の著書『ロシアの中国人移民』で、中国人コミュニティを通じてディアスポラの活動を事実上行う「疑似ディアスポラ (квазидиаспора)」として描いている。彼は、現代の中国人移民は、安定的でよく組織化されたエスニック集団としては形成されていないし、常にメンバーを変える短期滞在型の中国人移民にはディアスポラとして民族文化の統一性を共有することはできないが、集団的活動を支えるコミュニティ組織と活動があり、これこそ「疑似ディアスポラ」としての特徴を表している、と主張する(Ларин, 2009, pp.156-159)。この本には、そうしたコミュニティ組織が多く挙げられているが、それらの組織がどのような活動を行っているかは言及もなく、ディアスポラの活動を行っているかどうか分からないままである。彼は、中国人脅威論を諷める良心的なロシアの中国研究者であるが、そうした論調のなかにも、中国人を擬似的であれ、ディアスポラとして集団化させ理解しようとする傾向がロシアにある。

中国人を移民であれ一時滞在者であれ、総じてディアスポラと呼ぶ傾向は、ロシアだけなのだろうか。どのようにロシアにおける「中国人ディアスポラ」という表現は特異なのだろうか。「中国人ディアスポラ」という表現の根源と広がり、そしてロシアの中国人がディアスポラたりえるのかを判断する分析視角を移民研究のなかを探っていこう。

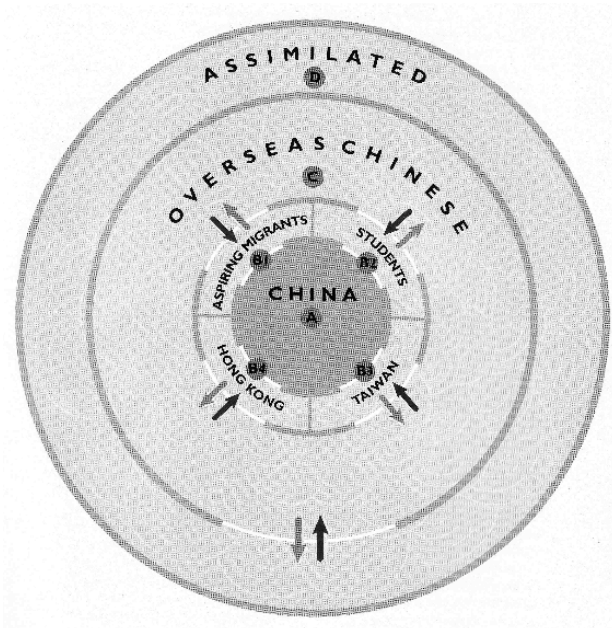
3. 移民研究における「中国人ディアスポラ」という表現

中国人ディアスポラというイディオムはそもそもロシアだけでなく、世界的に誇張される傾向にある。そして、ディアスポラ概念そのものが、非常に拡張的に利用されるようになったことがその背景にあるとは考えられる。ディアスポラが、「あまりに深いユダヤ人的刻印が刻まれている」(臼杵, 2009, p.21) がゆえに、その概念拡張に異議を捉えようとするのが本論の目的ではないし、本当の意味での「ディアスポラ」とは何かを問おうとしているわけではないことは最初に断っておきたい。「ディアスポラ」というメタファーが、ホスト国において誰によってどのような装置として機能するかが、本論にとっての最大の関心事である。中国社会科学院によれば在外中国人は3500万人にもものぼり、世界最大の移民集団である。ホスト国がどのように在外中国人およびその一部を名付けるか、在外中国人のなかで中国人ディアスポラはどのように定義されているのかを、まず見てみよう。

⁷ ゲリブラスは、「ディアスポラという言葉は、母国や祖国への帰還という切望をもって住む人々を指すのであり、これは中国人には当てはまらない。共同体 (община) はホスト社会における自らの地位拡大・向上を促進するとともに、成員増加に邁進する集団である」(Дятлов, 2004, p.192) と、移民研究者との討議において、安易にディアスポラという言葉を使った発言に苦言を呈している。ただ、上記に引用にも見られるように、ゲリブラスのディアスポラ定義は、古典的ディアスポラの定義に近い。

シンガポールのチャイニーズ・ヘリテージ・センターが発行する『華人エンサイクロペディア』では、華人（Chinese Overseas もしくは Overseas Chinese）⁸は単に中国本土に住む中国人以外を指すのではなく、本土中国人、香港や台湾の中国人、海外留学生、海外に一時的に在留している中国人、そして完全にホスト国で同化した中国人を除いた中国人で、ホスト国で定住し、帰化した中国人を指す（図1）。この華人という言葉は、よく中国人ディアスポラと同義的に使われるが、このエンサイクロペディアでは、ディアスポラはよいイメージと捉えておらず、あえて華人という言葉を利用している。チャイニーズ・ヘリテージ・センターは、世界に散らばる中国人コミュニティをグローバルに総体として研究するために1995年に設立され、このエンサイクロペディアは華人自らをどのように定義しようとしているかを考えるうえで、興味深い。世界に分散する中国人コミュニティを総体として描く言葉として「華人（Overseas Chinese）」を定着させたのは、このエンサイクロペディアの編者のリン・パンであるとされ、この「華人（Overseas Chinese）」が中国人ディアスポラと同義として使われるようになってきた（Ang, 2006, p.324）。

図1 華人イメージ



出所：Pan (ed.), 1998,, p.14.

華人＝中国人ディアスポラという構図は、あまりに乱暴であるが、それでも少なくとも広く普及するようになった中国人ディアスポラの定義の原点が、華人にあることは間違いない。つまり、中国人ディアスポラであるための必須条件は、ホスト国で定住し、帰化した中国人でなければならない。

⁸本稿では、華僑は、中国籍を保持しつつ海外に寄寓する中国人を指し、華人はホスト国に帰化した在外中国人を指すことにしよう。

⁹ Decrees of Badness という表現で、このイメージの悪さを表している（Pan, 1998, p.16）。

ディアスポラの定義は様々である。ここでは、Brubaker がまとめた包括的なディアスポラの特徴をとりあげよう。Brubaker は、従来のディアスポラ概念を形成する中心的な基準として、3つの基準、①離散 (Dispersion)、②故郷志向 (Homeland Orientation)、そして、③境界維持 (Boundary-Maintenance) を挙げている (Brubaker, 2005)。離散は、もっとも広くディアスポラを定義する場合に使いやすい基準であり、空間的に離散する者はすべてディアスポラの成員であるとする無限のディアスポラ定義の拡張に寄与する。ただし、離散は、単なる空間的な拡散ではない。少なくともディアスポラ論では、「強制された離散ないしはトラウマ的な離散」との認識が、Cohen(2009)にも見られるように、広く一般に受け入れられている特徴である。第二基準である故郷志向は、想像上もしくは実際の郷土への志向であるが、ディアスポラたることを権威づける価値・アイデンティティ・忠誠心の源泉となる。とはいえ、ディアスポラにとっては、故郷志向が重視されず、在留地の水平方向の絆にこそ意味があるとするディアスポラの脱中心化の議論もある。第三基準である境界維持は、ホスト社会とは明確に区別できるアイデンティティを維持し続けることを意味し、自ら意図的に同化に抵抗することで境界は維持される。Brubaker は、上記三つの基準をディアスポラ分析の道具として提示したのではなく、従来のディアスポラ研究に共通する基準を取り上げたに過ぎない。彼は、ここから後に述べるようにディアスポラ概念の脱実体化を試みる。これについては、後ほど展開したい。

全ての移民がディアスポラを形成するわけではない。Esman によれば、移民と「ホスト国との間の、そして、彼らと他のディアスポラとの間の境界を生み出す独自のコミュニティを形成する者たちだけがディアスポラを形成する」のであり、「こうした境界は、ホスト国において自らの独自のアイデンティティや特有の文化を維持しようとする移民達によって生み出されるもの」(Esman, 2009, pp.14-15) である。

Esman のディアスポラの定義は、Cohen らのディアスポラ定義よりも柔軟であり、より日常的に利用されている意味に近いし、特に古典的なディアスポラ概念からの脱却を試みている点で興味深い。かなり広く設定した Esman のディアスポラ概念においても、移民とホスト国社会との間に線引きされる境界とその維持が、ディアスポラの認知にとって重要な要素である。

さらに、ディアスポラは、境界をもつ実体というよりは、「イディオム (Idiom)」、「立ち位置 (stance)」や「主張(claim)」を通した社会的実践 (social practice) と考えるべきであると Brubaker は論じている (Brubaker, 2005, p.12)。すでに述べたように、境界は同化への意図的な抵抗により維持される。ホスト国・社会側による移民の社会的排除の結果であろうと、移民側の社会的実践として、はじめてディアスポラとしての境界は維持される。もしロシアにおける中国人の「イディオム」、「立ち位置」、「主張」が母国とのつながりを維持し、境界維持のための実践がなされているならば、それは中国人自身が自らをディアスポラとして集団性を持ち、ディアスポラとしての境界を見だし、維持しようとしつづけていると理解することができよう。結局、ディアスポラとは、アイデンティティ形成のある種のプロセスであり、その実践である。私は、ディアスポラ概念を構成する境界維持の実践に着目して「中国人ディアスポラ」を考察してみたい。

結論を先取りして言うならば、ホスト国側が恣意的に、ご都合主義的に、中国人をディアスポラと呼ぶことは、中国人自身の「立ち位置」と「要求」をもとに中国人が

形成してきた境界というよりは、少なくとも彼らの「要求」とは関わりなくホスト国側が想像した中国人ディアスポラとしての「立ち位置」と「要求」、もしくはホスト側の「立ち位置」と「要求」によりホスト国が自ら設定した境界である¹⁰。

ロシアだけでなく、中国人移民は、そのように扱われる傾向にあり、この「ディアスポラ」という言葉が生み出す在外中国人に対する無理解を移民研究者は意識しなければならない。ロシアで働く一時滞在型中国人が、あたかも世界に展開する中国人ディアスポラの一部のように描き、ロシア極東地域社会への脅威となる中国人移民の到来を描く概念として便利に利用される「中国人ディアスポラ」という概念は、現実との距離があるばかりでなく、誤ったステレオタイプを植え付ける道具となる。ロシアの移民研究者のエキセントリックなこの概念の活用と迂闊なマスメディアによるこの言葉の乱用は、顔の見えない中国人の異質性をさらに警戒すべきものとしてロシア移民社会を語る文脈に保存する。分析の道具としていかにディアスポラという言葉を活用できるか、移民研究者は真摯に考える必要がある。

4. ロシアの中国人は「中国人ディアスポラ」たりえるか？

ロシアの中国人のディアスポラ的实践を考えると、まず「中国人ディアスポラ」と想像・想定される集団が、どのように実体化されるのかを考え、もし、その根拠が薄弱であるならば、「中国人ディアスポラ」なるものの実体化を否定することができる。本節では、ディアスポラとしての絆、出自、ディアスポラ的实践に分けて、考察してみよう。

(ディアスポラとしての絆)

Cohenによれば、ディアスポラがディアスポラたるゆえんは、過去の移民の歴史との分かちがたい絆と同じバックグラウンドを分かち合う人々との共通の民族性を受け入れるところにある (Cohen, 1997, p. ix)。ディアスポラ形成にとって、歴史的な根源と絆こそが現在のアイデンティティと所属を決定するうえで重要である。これはディアスポラ概念において広く共有されている原則である (Toninato, 2009, p.3)。労働移民は、ホスト国においてディアスポラを形成することはできるが、ホスト国に滞在することで自動的にディアスポラが形成されるわけではない¹¹。こうした世代を重ねた、もしくは世代を超えた歴史性は、ディアスポラ形成の重要な要素である。

1980年代後半から中国人労働者が出稼ぎにロシアを訪れるようになり、すでに20年以上も経過する現在において、原初的ディアスポラとしての労働移民がディアスポ

¹⁰ ディアスポラと呼ばれながら、同様にディアスポラらしい「立ち位置」や「要求」が見られないグループとして、米国のアルメニア人が挙げられる。アルメニア人たちは、自らディアスポラの「立ち位置」から逃れようとし、母国や他国のアルメニア人とのつながりから距離を置こうとする (Brubaker, 2005, p. 12)。

¹¹ 労働移民はホスト国政府の思惑とは別に無制限にホスト国にとどまり、世代を重ねる行為を伴う。そうした労働移民が原初的ディアスポラとなることがある。Weiner (1986)を参照されたい。

ラ・コミュニティを形成してきたのであれば、ロシアにおいても中国人ディアスポラを論じることができるだろう。

しかしながら、多くの研究が示すように、現在のロシアの中国人の多くは、一時滞在者 (sojourner) である。ゲリブラスは、自らの社会調査で世帯主の 1.4% だけしか妻をロシアに連れて来ることを望んでおらず、子供を連れてくるとなるとさらに少ないと示している。都市に住む中国人の 57.3% は、単身赴任であり、家族とともにロシアにやってきた中国人は 2 割に満たなかった (17.9%) という (Гельбрас, 2001, pp.66-67)。ロシアで国籍取得を希望する中国人は、一割強 (12.5%) しかいない (Гельбрас, 2004, p.90)。また、ラーリンは、2000 年代初め、ロシア極東地域でロシア国籍を取得するか、一時もしくは長期の居住許可を取得した中国人は、1000 人に満たないと論じている (Ларин, 2006, p.393)。ロシア極東地域で働くほとんどの中国人は、ロシアの滞在を一時的なもので見なされている (Repnikova and Balzer, 2009, p. 13)。家族も中国に残し、単身で訪れ、国籍も居住許可も必要としないロシアの中国人は、その意味では、華人ではなく、華僑的活動を行う中国人である。

現在ロシアに在留する中国人が、華人でなくとも、また、十分な歴史性がなくとも、世代を超えて、つまり帝政期からのロシアに残る中国人との連携のなかに、ディアスポラ社会が形成されることはあり得るだろう。しかし、後に述べるように、旧ソ連時代にロシアに同化した初期の中国人 (オールド・カマー) と 90 年代以降の新しい中国人 (ニュー・カマー) との間には連携は見られない。

これは、そもそもニュー・カマーと連携を見いだすはずのオールド・カマーの存在が非常に脆弱であることに起因する。中国人は、1930 年代半ばに民族浄化の対象となった少数民族のうちのひとつであった。多くの中国人 (一時滞在者であれ、帰化者であれ) が、このとき母国へ送還されるか、粛清の対象となった。本国に送還された者の運命は、1966 年から 76 年まで続く中国文化大革命の犠牲であった (Benton, 2007, p.27)。粛清の嵐の後の 1959 年のソ連邦センサスでは、中国人は 19097 人、そのうち中国語を母国語とした者は 75.1% の 14343 人、ロシア語を母国語とする者は 24.2% の 4631 人いた。2002 年ロシア連邦センサスでは、中国人は 34577 人で、そのうち中国国籍をもつ者は 30598 人、つまりロシア国籍の中国人は 3979 人と非常に少ない¹²。対象となる領土が異なる両センサスの比較は意味がないにせよ、ロシアではオールド・カマーは存在しないに等しいマイノリティであった。

(どこからやってきたのか)

帝政ロシアへの中国人出稼ぎ労働者の主な供給源は、山東省であることは不思議ではない。これは、現在の山東省煙台市が対口交通網の拠点であり、ロシア革命前後のロシア極東地域の中国人商人の主体は、山東商人であったためである。1917 年のハバロフスクの中国人商店 121 軒のうち 116 軒 (96%) が山東商人によるものであったし、中国東

¹²2002 年センサスでは滞在期間が一年未満の外国人も一部紛れ込んだり、外交官や国際機関職員は家族も含め調査対象から外れたりするなどの混乱はあるものの、総じて定住人口、つまり一年以上ロシアに居住している者に限った調査である。

北地方の黒河で活躍する商人の多数派は山東商人であった（徐、1999）。

当時、ロシア極東地域への中国からの出稼ぎに必要な旅券申請は、芝罘で行われており、その斡旋に芝罘の宿所経営者が関わっていた（サヴェリエフ、2005、p.229）。ハバロフスク市の中国人移民の95%、ニコリスク市の88%、ウラジオストク市の75%が山東省出身であったという。中国人契約労働者の募集は山東省にて行われ、山東省煙台の港とともに山東省や華北とロシア極東地域をつなぐ交通機関が整備されていたことより、山東省はロシアに中国人移民を送り出す役割を担い、世界の移民システムにいち早く取り込まれていた（サヴェリエフ、2009、pp. 45-46）。Boykoも、1920年代の西シベリアの中国人の出自は多様であったが、山東省、特に煙台出身の者が多かったとしている（Boyko, 2001, p.20）。

現在、ロシアにいる中国人の出身地は、オールド・カマーの出身地とは大きく異なる。2002年にグリブラスが行った社会学的調査では、イルクーツクでは中国東北3省（黒龍江省、遼寧省、吉林省）の出身者が52.9%、ハバロフスクでは90.1%、ウラジオストクでは52.6%を占めるという（Гельбрас, 2004, p.85）。特に、ロシア極東地域では、黒龍江省出身者が目立った存在である。

帝政ロシア時代、北京条約によって定められた国境の両岸は、定住者の少ない地域であったため、欧露部からの入植者と中国人の北上とがぶつかり合う地点であった。中国東北三省の人口拡大は、ロシア人の南下を懸念した清国政府の積極的定住策と相まって、山東省出身者を中心とする漢人移住者の定住化によって実現されていたし（サヴェリエフ、2005、p.208）、その国内移住の延長線上にロシア極東開発の労働力需要があった。とはいえ、帝政時代の中国人が山東省出身であることと、現代ロシアで働く中国人が山東省由来をもつ黒龍江省出身者であることを関連づけて、同じ郷土人であると見なすには無理があり、出自が異なるとみるのが妥当である。

オールド・カマーとニュー・カマーの出身地が異なることは、重要であろうか。スケルドンによれば、中国からの移民は、非常に地方特化した出身地から特定の移動先への移民によって構成されており、そのことは「中国人ディアスポラ」という大風呂敷の概念とはそぐわないと論じている（Skeldon, 2003, p.59）。山東省出身者は、ロシアにオールド・カマーがやってきた頃より、世界の移民システムに大きく関わってきた華人達であったが、中国東北地方、特に、黒龍江省出身者は、そうした世界の移民システムに参加するようになったのは最近のことであり、その向かう先もロシアが中心のマージナルな存在である。それゆえ、オールド・カマーとニュー・カマーの出自の違いは、中国人ディアスポラ形成を疑うひとつの要因となる¹³。

（ディアスポラ活動の有無）

境界維持を、その社会的実践において中国人ディアスポラに見いだそうとするのなら、ディアスポラ活動を支える社会組織の実践に着目する必要がある。

¹³受入国におけるディアスポラ形成において、いきなり集団的想像力たる中国なるものが華人達をつなぐわけではない。ただし、華人・華僑の「想像された中国」のもとでの運動の存在を無視しているわけではない。

帝政末期からソ連までのロシアの中国人は、ディアスポラと呼べる活動を行っていたかもしれないが、ディアスポラとしての境界を維持できなかつただけでなく、存在そのものも維持できなかつた。

サヴェリエフは、ロシア極東への帝政時代の中国人・朝鮮人・日本人移民を定着パターン、同化・帰化過程の特徴、規模などによってタイプ分けしたところ、中国人移民は非熟練労働者と商人が支配的な多元的移民であるとしている（サヴェリエフ、2005、p.287）。そうした山東省出身の中国人移民（一時滞在者も含め）が、ホスト社会から孤立し、母国の伝統文化を保持し、同郷の人間関係を維持し、ロシア国内でエスニック・ネットワークを保ったと考えている。中国人街（中国人集落）が各都市に形成され、1890年代には「百万人街（ミリオンカ）」と呼ばれるようになっていたという（サヴェリエフ、2005、p.224）。帝政時代、1889年に「清国人自治団」がロシア政府の要請に基づき設立された。中国人移民の管理、徴税、住民登録の徹底を行うためのものであったが、「極めて限定的な組織化」（サヴェリエフ、2005、p.139）であったという。この自治団は、1898年に強制的に解散させられる。中国人社会の隠密行動の温床とロシア政府が判断したからである（Ларин, 2009, p.55）。一部、ニコライスク・ウスリースクでは、1901年までこの自治団が維持された例があるようだが、官製華人組織であったことと、その存在があまりに短期であったことから、ディアスポラ活動を支える社会組織として取り上げることはできないだろう。

1920年代の中国人コミュニティは、難しい立場にあった。ソ連時代の華人組織は、モスクワ中山大学（孫逸仙大学）同様に短命に終わっている。中国の利益となるように非合法的活動を行う危険性があるとして、1923～1924年に華人組織メンバー逮捕とともに、古くからの華人組織そのものが閉鎖された（Ларин, 2009, p. 127）。1920年代末にも中国人は粛清の対象となった。華人労働者同盟なども1920年代末に消滅している。1920年代後半、中国人の本国強制送還や逮捕などが広範におこなわれるようになると、華人の帰化が増加した。また、1930年代にシベリアで設立された華人共同体組織の多くも長続きはしなかった（Boyko, 2001, p.24）。Boykoは、「西シベリアの中国人コミュニティは、故郷からも、ロシアの定住先でも、極度に離散させられた」存在であるとし、旧ソ連時代の中国人は「人口社会学的構成としても文化的構成としてもロシアの民族地図から実質的に消滅」しているがゆえに、「西シベリアの中国人ディアスポラは、東アジアや米国やその他の国々の中国人ディアスポラとは著しく異なる」としている（Boyko, 2001, pp.24-25）。

第二次世界大戦期には、シベリアや極東地域の市場には中国人が野菜を売る姿が見られたが、第二次世界大戦後はその姿も見られなくなった。ソ連崩壊後に中央アジアに強制的に移住させられた朝鮮人がロシア極東地域に帰還したが、国外追放の目にあった中国人がロシア極東地域に戻ってくることはなかった（Pal, 2007, p.45）。

1990年代初期、シベリアやロシア極東地域の人々にとって、中国人の出現は、「ただ予期せぬ出来事であるだけでなく、まったく新しい出来事」（デャトロフ、2010、p.288）であった。帝政末期からソ連初期に旧ソ連に残された中国人、まさにディアスポラの名にふさわしい中国人は、強制的に中国に送還されたり、粛清されたりして、すでに述べたように民族としてロシアに在留する中国人はごくわずかであった。それゆえ、ロシア人にとって、旧ソ連時代の長い期間、中国人問題はなきに等しい問題だった。

19世紀から20世紀初頭までの中国人ディアスポラと現代ロシアの中国人との間には、歴史的連続性も世代を超えた連携も存在しない。Maslovは、1950年代にロシアにやってきたオールド・カマーと90年代のニュー・カマーの間には明確な線引きがあり、「モスクワ在外華人協会」がその2世代の関係を仲介する役目を担っていると考えられていると論じている (Maslov, 1998, p. 331)。

残念ながら、マシロフの挙げた中国人ディアスポラ組織が現在も存在するのかわか、確認はできなかった。中国企業家連盟 (Лига китайских предпринимателей) は、中国人ディアスポラ組織とされ、スベルドロフスク州の中国人の課税・関税問題のコンサルタント業務や支援を行うという報道は、中国人同郷人組織の活動の一端として報道で伝えられている¹⁴。露中通商・経済友好センター (Российско-Китайский Центр торгово-экономического сотрудничества) もまた、中国人ディアスポラ組織として紹介されるが、1998年に設立されたこの組織は、実際のところは、ロシア産業企業家同盟のイニシアティブによるものであり、ディアスポラ組織とは言えない。少なくとも、これらは露中貿易や投資プロジェクトの円滑な促進を両国政府の支援のもとに行うことができるように設置された組織であり、在露中国人とホスト国市民との間の境界を維持しようとするディアスポラ行動に関連する組織ではない。これ以外に、大小様々な華人組織があってもおかしくないが、ゴンチャロフによれば、ロシアの華人組織は十分に機能しておらず、モスクワの中国人の役には立っていないという (Goncharov, 2003, p.39)。少なくとも、いまのところロシアで働く短期滞在中国人やロシアに移住した長期・帰化中国人の間に商工会的活動以上の動きは見られず、顕在化したディアスポラ活動は見られない。

また、ビクトル・ラーリンは次のように述べている。

「世界各地で見られる”チャイナ・タウン”は、ロシア極東において未だ存在していない。またロシア極東に現存する中国人コミュニティも、多の中国人を引きつける存在として機能を果たしていないのである。こうしたコミュニティの数は微々たるものであり、中国人の間での影響は限られたものである。」(ラーリン、2006、p.75)

ラーリンは、ハバロフスクやウラジオストクなどに設立された中国人の社会組織を取り上げて、中国人の団結を図る意図があると述べる一方で、現地中国人留学生がまったくそれらの活動を把握していない事実を示している。

ヂャトロフは、ロシアの都市の中国人市場が、ディアスポラ化を支える社会的組織になっていると論じている。イルクーツクの中国人市場「上海」を例に、こうした市場が単なる市場から中国人商人のロビー活動などを行う社会組織へと進化する姿を描き、中国人のディアスポラ化の可能性を論じている (Дятлов, 2005, p. 104)。中国人市場が中国人移民組織の母体となってディアスポラ活動を支えるとする発想であるが、前述したように、中国人のディアスポラ化を論じているのであり、現在のロシアの中国人をディアスポラとして描いているわけではない¹⁵。しかも、ヂャトロフが描いたその中国人市場はすでに消

¹⁴ http://www.nr2.ru/ekb/13_44600.html (2011年5月11日取得) を参照。

¹⁵ デャトロフは、中国人もシベリアにとって「新しい集団」であることには違いないが、

滅している。

ロシアのシベリア・ロシア極東地域の中国人が、現在ディアスポラたる社会的実践を行っているかどうかは、以上のように、疑わしい。私は、ロシアにおける中国人のディアスポラ形成の可能性そのものを疑うつもりはない。デャトロフの論じるように、中国人のディアスポラ化は今後着目すべき運動かもしれない。ただし、私は、中国人のディアスポラ化如何の予測に与するつもりはない。

5. 「中国人ディアスポラ」の脱実体化

これまで述べてきたように、中国人ディアスポラという表現は、ロシアにおける中国人認識を漠然としたディアスポラという範疇に入れ込み、中国人ディアスポラを総体としての中国人に対する呼称とし、冷静さを求めつつも緊張を解かないメタファーとしてしまっている。むしろ、ロシアには、ロシア人以外の異民族外国人を中国人に限らずディアスポラと表現する傾向はある。ただし、日常会話において移民集団という程度で利用されるディアスポラが脅威の対象とされるとき、ディアスポラを実体化しようとする政治的動機と結びつきやすい。それゆえ、これは、あまり賢明なメタファーではない。では、ディアスポラでないとするれば、ロシアの中国人はどのように特徴づけられるであろうか。今世紀に入ってからロシアの中国人の姿を描いてみよう。

別稿で私は、ロシアで働く中国人の特徴を次のように描いている。ロシアで働く中国人は、自らのビジネスをロシアで積極的に展開し中国とロシアを往来する短期ビジネス移民であり、それゆえ中国人労働移民はロシアの労働力不足という需要から生まれるのではなく、中国人のロシア極東地域やシベリアでのビジネス展開に応じた需要から生まれるものであり、そのビジネスは中国人以外には閉鎖的であり、中国人コミュニティがロシアのコミュニティやビジネスネットワークにうまく絡まない現実があるようだ、という特徴である（堀江、2011、p.19）。

すでに述べたように、現在のロシアに長期在留する中国人は少ない。ロシアにおいて中国人として目立つ存在は、ロシアに居住許可をもっている一時居住者、長期居住者、定住者ではなく、外国人労働者として登録されている一時滞在者である。これは、多分に現在のロシアの移民政策によって強いられた特徴であるといえる。帝政期およびソ連期粛清までの中国人には、長期居住者・定住者がいたことはすでに述べたが、現在でも制度が許せば長期滞在を望む中国人が多いことは、近年の社会調査においても明らかである。ただし、ロシア国籍を取得し帰化することを望む者は、非常に少ない。

現在のロシアの移民政策は、CIS 諸国からの外国人労働者の受入を積極的に行い、国籍取得への道筋を描いているものの、非 CIS 諸国からの外国人労働者の受入については障壁を高くし、国籍取得までの道程は険しい（堀江、2010）。ロシアで働くには、労働許可が必要であり、また、労働許可割当というキャップも設けられている。非 CIS 諸国からの外国人労働者は、ロシア入国前に労働許可を取得しなければ、ビザそのものが発給されな

中国人でなく、旧ソ連諸国、特に、カフカス地域からの移民達が「新しいディアスポラ」を形成し、地方の政治論議の対象となっていると論じている(Дятлов, 2005, p. 130)。

い。高度人材に関する労働許可の規制緩和は2007年から行われたが、中国人にとってロシアの移民政策は、短期就労・母国帰還を事実上義務づけるものであった。

ある調査では、ロシア極東地域住民の間では、中国人不法移民と労働移民に対しては否定的態度が優勢であるが、旅行者、ビジネスマン、商人に対する態度は肯定的態度が否定的態度を上回っているという。同時に、ロシアとアジア太平洋地域諸国との関係に関する住民評価では、現状以上に将来に対する中国との関係に米国や日本との関係以上に期待を示している構図が示されている（Ларин, 2006, c.284-285）。ロシア極東地域での経済発展に積極的にアジアの外国人労働力を活用すべきとして、ウラジオストク経済サービス大学のベズルコフとゴルベンコヴァは「発展のための移民（受入）」を唱えている（Безруков и Горбенкова, 2006）。中国から労働力不足に悩むロシア極東やシベリアへの労務輸出は、中ロ両国にとって利益のあることであるとの積極的な評価もある（Гришанова, 2009. c.69）また、好むと好まざるに関わりなく、ロシア極東地域は、中国東北地方や北朝鮮、ベトナムなどからの外国人労働者を「効率的な労働資源」として活用せざるを得ない段階にきている（大津・アブデーエフ, 2010, pp.156-157）。ロシア極東地域では、中国人移民問題や中国脅威論が再燃しやすい地域であることは確かであるが、現実的な選択として国境を通じた中ロ経済関係を肯定的にとらえ、共存していく未来を住民自身が見据えているとする主張は、近年の大きな研究潮流のひとつであると考えられる。ロシア極東地域での中国人労働力活用が不可欠である以上、移民管理をさらに強化すべきとの主張も生まれる¹⁶。18世紀末のプリアムール総督府のアジア人移民政策は、「アジア人移民を”統制しつつ利用する”政策」（松里, 2008, p. 309）であったとされるが、それは現代ロシアの中国人出稼ぎ労働者に対してもよく当てはまる。ただし、シュクルキンは、今日のロシア極東地域の中国人移民は、一世紀前のロシア極東地域における中国人移民に比べ経済的重要性は低く、中国人労働者や中国人ビジネスに係わる領域は、一世紀前よりも狭いと論じている（Shkurkin, 2002, p.93）。

18世紀に中国から世界に飛び出した移民は、年季契約労働者（クーリー：苦力）、職人階層、貿易商の3階層に分けられる（Cohen, 2008, p.89）。本国では飢えるよりましということで移民したクーリーのイメージは、現代ロシアにおける中国人移民のイメージにも強い影響を与えている。しかし、実際には、ロシアの中国人契約労働者に、飢えにつながる悲壮感やトラウマが支配していることはない。国境地域の隣接性から往復自在の出稼ぎとしての中国人契約労働者の多くは、中国人事業に係わる形での契約労働となっている。19世紀、多くの国で彼らはチャイナ・タウンを形成したが、現代ロシアにおいて契約労働者や貿易商がチャイナ・タウンを形成した例はまだない。中国人貿易商が寄り集まる中国人市場など、主に商人層がロシアにおいて中国人の集団性を象徴する存在となっている。

ロシアビジネスにおいて限定された領域で躍動してきた中国人貿易商は、合計した滞在年数は長くなっても、振り子のように本国とロシアとを頻繁に往復する極めて移動性の高い「ハイパーモバイル移民」である。中国ではそうした中国人移民を「太空人」と呼ぶそうである。これは、宇宙飛行士のことだそうだ。ハイパーモバイル移民としての

¹⁶ ChinaPro2010年3月15日付記事 (<http://www.chinapro.ru/rebrics/20/3713>: 2011年5月20取得) を参照。

中国人貿易商が、ロサンゼルスと中国本土を結ぶネットワークを活用し、太平洋貿易促進の担い手になってきたという例をさして、そう呼ばれる。この「ハイパーモバイル移民」が、そのまま現代ロシアのハイパーモバイル中国人移民に適用できるわけではない。ロシアではニュー・カマーを引き受けるだけの確固たる中国人ディアスポラが存在していたわけでもなければ、オールド・カマーが中国とのネットワークを維持してきたわけではない。彼らにとって、移民の重要な側面は、中国の国民文化からロシアの国民文化への変化ではなく、また、中国人であることの境界維持に取り組むことにも熱を上げず、ビジネスチャンスがあれば赴き、ロシアにおいても我が家のようにくつろぐことのできるハビトゥスを持ち、日常的な国境の往来を厭わず、自国の製品を売りさばく商売人としての活動である。好況には労働市場に招き入れられ、不況では労働市場から放逐され、ロシアの経済的緩衝材となっている中央アジア移民たちとは大きく異なる。

「中国人ディアスポラ」という言葉は、ロシアに生じている新しい何かを説明するものだろうか。同化しない異質性へのいらだち、同化することへの我慢できないいらだち、これらは中国人がディアスポラ的要求として決然と対抗しようとしたものではなく、受入国側の政治的ディスコースに活用された想像されたディアスポラである。ロシアにおけるエスノフォビアは、ロシア人のアイデンティティの維持を目的としながら、自己を他の民族グループに厳しく対立させることへと駆り立てる（オレフ、2010、p.313）。「中国人ディアスポラ」という言葉をそうした所作のひとつと考えるならば、この言葉は、ホスト国がなんとしてでも中国人をディアスポラ化させようとする装置になる。

中国人ディアスポラという言説は、少なくとも現在のロシアにいる中国人自らのイデオロムではない。彼らは、ロシアにおける中国人コミュニティの構成要素として、境界維持の事業や企図は、ビジネス分野において見られても、社会的、文化的コミュニティ保存の動きは見えてこない。

デヤトロフが主張するディアスポラ化（Дятлов, 2005）は、中国人が「本当の」ディアスポラとして目覚めるという目的論的主張である。ディアスポラであるべき中国人がディアスポラでない現状のなかに、ディアスポラ化する運動を見いだそうとしているが、イルクーツクの中国人市場「上海」に見られた政治的活動は、市場の閉鎖とともに終焉する。デヤトロフは、そうした中国人の活動が市場維持活動なのかディアスポラの境界維持活動なのかについて、納得のいく説明はできていない。

中国人をディアスポラとして実体化させる試みがロシアの移民研究者のなかで行われてきた。「中国人ディアスポラ」はロシアの移民研究者やマスコミに指名されて存在することになった「想像されたディアスポラ」である。「中国人ディアスポラ」の境界は、ロシアに在留する中国人が意図的に維持を図った境界ではなく、ホスト国側が維持しようとする境界である。ロシアの中国人の活動を冷静に受け止める素地を作るには、中国人およびその移民理解は少なくとも「意図的な定義を通じて集団性に押しつけること」（Brubaker, 2005, p.13）であってはならない¹⁷。

¹⁷ ロシアの中国人をひとつの集団として、内的に同質で、外的に境界をつけられ、共通の目的のために統一的な行動をとる行為者にとらえる傾向は、Brubaker (2002)が言うところのグルーピズム (groupism) であり、それによる脅威論はそうした傾向の問題多き帰結のひ

参考文献

- 白杵陽、2009、「方法としてのディアスポラ」の可能性」、白杵陽（監修）『ディアスポラから世界を読む：離散を架橋するため』、明石書店。
- オレフ・グリゴリー、2010、「ロシアにおける超エスノフォビア」、堀江典生編著『現代中央アジア・ロシア移民論』、ミネルヴァ書房、pp.309-339。
- サヴェリエフ・イゴリ、2009、「第一次世界大戦期の中国人移民：ハルビンにおけるロシア企業による契約労働者の募集をめぐる諸問題」、『国際開発研究フォーラム』38、pp.41-54。
- サヴェリエフ・イゴリ、2005、『移民と国家：極東ロシアにおける中国人、朝鮮人、日本人移民』、お茶の水書房。
- デャトロフ・ビクトル、2010、「シベリア・極東地域におけるステレオタイプと移民恐怖症」、堀江典生編著『現代中央アジア・ロシア移民論』、ミネルヴァ書房、pp.285-307。
- ラーリン・ビクトル、2006、「ロシア極東の中国人：地域における見方」赤羽恒雄・アンナ・ワシリエバ編『国境を越える人々：北東アジアにおける人口移動』国際書院、pp.61-86。
- ゲリブラス、ヴィリヤ、2005、「ロシアにおける中国人の同郷人組織とマイグレーション」大津定美編『北東アジアにおける国際労働力移動と地域経済開発』ミネルヴァ書房。
- 徐万民、1999、「ロシア極東における中国山東商人」『環日本海研究年報』（新潟大学大学院現代社会文化研究科環日本海研究室）、6号、pp.53-64。
- 堀江典生、2010、「ロシアの外国人労働者管理の課題：高度人材の受入をめぐる」、大津定美・韓福相・横田高明編著『北東アジアにおける経済連携の進展』日本評論社、pp.159-171。
- 堀江典生、2011、「移民大国ロシアの軌跡：中国と中央アジアからの労働力移動に着目して」『ロシア・東欧研究』（ロシア・東欧学会）第39号、pp.13-25。
- 松里公孝、2008、「プリアムール総督府の導入とロシア極東の誕生」左近幸村編著『近代東北アジアの誕生：跨境史への試み』、北海道大学出版会、pp.295-332。
- Безруков, И.С. и Е.В. Горбенкова, *Перспективы использования азиатской рабочей силы в экономике Дальнего Востока России*, Владивосток: ВГУЭС, 2006.
- Дятлов, В., 2005, Миграции, мигранты, «новые диаспоры»: фактор стабильности и конфликта в регионе, пед. В. Дятлов, С. Панарин, М. Рожанский, Байкальская Сибирь: из чего складывается стабильность, Иркутск: Ноталис.
- Гельбрас, В.Г., 2001, *Китайская реальность России*, М.
- Гельбрас, В.Г., 2004, *Россия в условиях глобальной китайской миграции*, М.
- Гельбрас, В.Г., 2009, Китайские мигранты в Москве, Ж. А. Зайончковская, Н. В. Мкртчян, О. И. Вендина, Е. В. Тюрюканова, Т. Д. Иванова, В. Г. Гельбрас, *Иммигранты в Москве*, М: Три Квадрата.
- Гребенюк, А.А., “Реализация государственной программы по оказанию содействия добровольному переселению соотечественников в Россию: Первые результаты“, ред., С.В.рязанцев и Р.В. Маньшин, *Демографические перспективы России*, М.: Academia, 2008, с.36-40.
- Занребнов, Е., 2007, Экономическая организация китайской миграции на Российский Дальний Восток после распада СССР, *Прогнозис*, №1 (9), с.252-277.
- Ланин, А., 2009, *Китайские мигранты в России*, Москва: Восточная книга.

とつである。

- Ларин, В., 2001, "Посланцы Поднебесной на Дальнем Востоке: ответ алармистам", "Диаспоры" №2-3, С. 76-112.
- Ларин, В., 2006, *В тени проснувшегося дракона*, Владивосток: Дальнаука.
- Островский, А., 2002, Трудовые ресурсы Северо-Восточной Азии: какую выгоду может извлечь Россия, *Человек и Труд*, №1, С. 43-45.
- Мотрич, Е.Л., *Население Дальнего Востока России*, ДВО РАН, 2006.
- Портяков, В., 2006, Российский вектор в глобальной китайской миграции, *Проблемы Дальнего Востока*, №2, С. 10-21.
- Alexseev, Mikhail, 2006, *Immigration Phobia and the Security Dilemma*, NY: Cambridge University Press.
- Ang, Ien, 2006, Undoing Diaspora: Questioning Global Chineseness in the Era of Globalization, Hong Liu ed., *Conceptualizing and Historicizing Chinese International Migration*, London: Routledge, pp.321-343.
- Benton, Gregor, 2007, *Chinese Migrants and Internationalism: Forgotten Histories, 1917-1945*, NY: Routledge.
- Boyko, Vladimir, 2001, Chinese Communities in western Siberia in the 1920s – 1930s, *Inner Asia*, 3, pp.19-26.
- Brubaker, Rogers, 2002, Ethnicity without Groups, *European Journal of Sociology*, Vol.43, No.2, pp. 163-189.
- Brubaker, Rogers, 2005, The 'diaspora' diaspora, *Ethnic and Racial Studies*, Vol.28, No.1, pp.1-19 (白杵陽監修、『ディアスポラから世界を読む : 離散を架橋するため』、明石書店、2009年、所収) .
- Cohen, Robin, 1997, *Global Diasporas: An Introduction*, Seattle: University of Washington Press (ロビン・コーエン『グローバル・ディアスポラ』、駒井洋監訳、明石書店、2001年) .
- Cohen, Robin, 2008, *Global Diasporas: An Introduction (Second Edition)*, NY: Routledge.
- Esman, Milton, *Diaspora in the Contemporary World*, Cambridge: Polity Press.
- Goncharov, Sergei, 2003, The Chinese in Russia: Who are they?, *Far Eastern Affairs*, No. 9, pp.25-47.
- Maslov, Alexei, 1998, Russia, Lynn Pan ed., *The Encyclopedia of the Chinese Overseas*, Chinese Heritage Center.
- Pal, Nyiri, 2007, *Chinese in Eastern Europe and Russia: a Middleman minority in a transnational era*, NY: Routledge.
- Pan, Lynn (ed.), 1998, *The Encyclopedia of the Chinese Overseas*, Chinese Heritage Center.
- Repnikova, Maria and Harley Balzer, 2009, Chinese Migration to Russia: Missed opportunities, *Eurasian Migration papers No. 3*, Washington, D.C.: Woodrow Wilson International Center for Scholar.
- Skeldon, R., 2003, The Chinese Diaspora or the Migration of Chinese Peoples? , Laurence Ma and Carolyn Cartier eds., *The Chinese Diaspora: Space, Place, Mobility, and Identity*, Lanham: Rowman & Littlefield, pp. 51-66.
- Shkurkin, Anatolii, 2002, Chinese in the labor Market of the Russian Far East: Past, Present, Future, Pal Nyiri and Igor Saveliev eds., *Globalizing Chinese Migration: Trends in Europe and Asia*, pp. 74-99.
- Toninato, Paola, 2009, The Making of Gypsy Diasporas, *Translocations: Migration, and Social Change*, No. 5, issue 1, pp.1-19.
- Weiner, Myron, 1986, Labor Migrations as Incipient Diasporas, Gabriel Sheffer (ed.), *Modern Diasporas in International Politics*, London: Croom Helm, pp.47-74.